

学生の施設実習課題と実習の充実感（第2報）

三村 保子
(西南女学院短期大学)

I. 研究の目的

保育士養成課程で学ぶ学生にとって、保育実習は、カリキュラムのなかで **core** としての重要性をもつ。まず、これまでに習得した知識と技能・技術を実践に活用できるような実習事前指導が重要である。一方、実習体験を通して得られた問題意識を実習後の学びのなかで深め、解決を見い出していくための実習事後指導を充実させなければならない。この報告では施設実習に焦点を合わせ、実習中に達成感や充実感を体験することができるか否かが、実習に関する学びの大切な **key** になることを検討したい。

2001年の保育学会において、演者は、学生が自分の実習課題を適切に設定することと実習の充実感との関係を検討するために、一人の学生の施設実習体験を事例研究的に報告した。そこで明らかになったことは、次のようなことであった。

- ①実習課題を適切に設定するためには、実習施設および利用者についての事前学習が十分になされていること。とくに実習施設での事前オリエンテーション時に、担当する利用者やグループの面会などの機会が与えられること。
- ②実習日誌に利用者の様子と自分の言動が具体的に記録され、自分の失敗についても率直に記載し、利用者へのかかわり方の問題点を気づこうと努力がなされていること。
- ③実習先の実習指導者のコメントが学生の気づきや工夫をサポートするものであり、その日の実習体験の意味づけと次の日の動機づけとなっていること。
- ④学生が適切な実習課題を設定し、その課題を達成して充実感を体験するためには、養成校の教員と施設の実習指導者との緊密な連携が不可欠であること。

さて、今回は実習課題の適切さとその課題の達成度および実習の充実感との関係についてさらに検討をすることを目的に、学生にアンケート調査を行うことにした。

II. 研究の方法

①調査対象

2002年7月末から9月にかけて、10日間の施設実習を体験した本学保育科保育士養成課程で学ぶ2年次学生。

②調査期日

2002年10月4日、実習事後指導の時間にアンケート用紙を配布し、188名の学生から回答が得られた。

③調査内容

- ・「施設実習前に設定した実習課題は適切であったか」。評定は、「適切であった」「まあまあ適切であった」「あまり適切ではなかった」「適切ではなかった」の4段階評価とした。
- ・「設定した課題の達成度はどの程度だと思うか」。評定は、「達成できた」「ほぼ達成できた」「ふつう」「あまり達成できなかった」「達成できなかった」の5段階評価とした。
- ・「施設実習を終えて、充実感はどうか」。評定は「非常に充実していた」「まあまあ充実していた」「ふつう」「あまり充実していなかった」「充実していなかった」の5段階評価とした。
- ・自由記述欄に、「自分の設定した課題」と「その課題に関し、実習中どのようなことを学んだか」を記入させた。「実習の充実感」についても、感想を記述させた。
- ・さらに、「施設実習を体験して、施設に就職を希望するようになった」という項目を設け、該当者に施設の種類を選択させ、その理由を自由記述で求めた。

III. 結果と考察

- ①アンケート用紙に回答した188名の学生の実習施設は、児童養護施設85名、重症心身障害児施設23名、障害幼児通園施設39名、その他の障害児(者)施設33名、乳児院8名である。

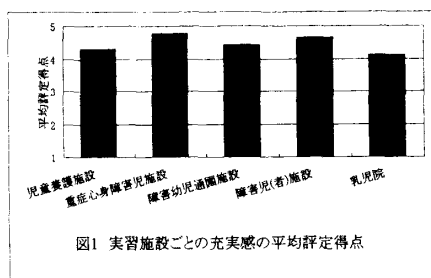
- ②実習課題の適切さと課題の達成度、実習の充実感の相関については次のような結果がみられた。課題の適切さと達成度の相関が有意であった ($r=0.56, p>0.001$)。課題の達成度と実習の充実感の相関も有意であった ($r=0.22, p<0.01$)。(表1) このことから、適切な課題を設定できたと感じている学生は、その課題を達成できたと感じていることが認められる。さらに、自分の設定した課題を達成することができたと感じている学生は、実習が充実していたと自己評価していることが推

測できる。

- ③充実感に関して実習施設 5 種類の 1 要因分散分析を行った結果有意な差がみられた。 $(F(4,183)=2.96, p<0.05)$ 。下位検定の結果、児童養護施設、乳児院、重症心身障害児施設、障害幼児通園施設、その他の障害児(者)施設に次のような有意の差が認められた。(図 1) 児童養護施設と重症心身障害児施設 $p<0.05$ 、乳児院と重症心身障害児施設 $p<0.05$ 、児童養護施設とその他の障害児(者)施設 $p<0.05$ 。このことは、児童養護施設や乳児院で実習を行った学生よりも、重症心身障害児施設や障害児(者)施設で実習を体験した学生の方が充実感が高いことを示している。実習開始前は、重症心身障害児施設へ配属された学生は「自分は、10 日間の実習をやっているのではないのか」という不安を強く感じている者がかなりいるが、実習終了後は「言葉によるコミュニケーションはとれなくても利用者の笑顔がうれしかった」「とてもやりがいを感じた」「援助の仕方をもっと知りたい」「施設の職員から学ぶことが多かった」「この実習で成長できた気がする」などと感想を記している。

表 1 適切さ・達成度・充実感の相関

	達成度	充実感
適切さ	0.56 $p<.001$	0.09 n.s.
達成度		0.22 $p<.01$



- ④188 名の回答者のうち、8 名の学生が実習課題の適切さ、課題の達成度、実習の充実感にそれぞれ「適切であった」「達成できた」「非常に充実していた」に該当すると記入しているが、その課題は、次のとおりである。「食事・衣服の着脱・排泄などの基本的な生活習慣の援助について学びたい」(知的障害幼児通園施設)、「食事介助・おむつ交換などをする時、言葉かけをしっかりとする」(重症心身障害児施設)、「利用者の心にそった言葉か

けを心がけ、コミュニケーションを多くとりたい」(障害者施設)、「子ども同士のケンカに対してどう対応すればよいか学びたい」(児童養護施設)、「食事のマナーについて保育士の援助・指導を学びたい」(児童養護施設)、「子どもの一日の生活の流れを把握し、保育者の子どもへの援助を学ぶ」(児童養護施設)、「子どもたちの生活の流れを知ること、子どもたちに遊びを教えたい」(児童養護施設)、「保育士は利用者の介助以外の自由時間に利用者とのどのような関わりをしているか学ぶ」(重症心身障害児施設)。以上の課題に共通していることは、日常生活の基本的な生活動作の援助やコミュニケーションのとり方など、身近で具体的なものであり、学生が 10 日間の実習で達成感の得られやすいものに設定されていることといえよう。

- ⑤「施設実習を体験して、施設に就職を希望するようになった」という項目に対しては、次のような結果が得られた。

障害児(者)施設(重症心身障害児施設、障害幼児通園施設も含む): 29 名 児童養護施設: 7 名
乳児院: 3 名 合計: 39 名 (20.7%)

実際に施設に就職する学生は毎年約 10 名 (5%) であることを考えると、20%という数字は、実習直後の学生たちの実習の充実感を反映しているものとして理解することができる。事実 31 名が「非常に充実していた」とし、残りの 8 名が「まあまあ充実していた」としている。

IV. まとめ

学生にとり、施設実習は殊のほか不安と期待の交錯する実習といえる。これまでに体験したことのない多くのことを学びたいという願いと同時に、自分はやっていけるのだろうかとの不安をかなりの学生が抱いている。こうした学生たちが、実習の準備段階で、具体的な自分の実習課題を見つけ、自分に実行可能な努力目標をもつことはきわめて重要な意味をもってくる。この時、学生自身の主体的な努力と養成校教員の適切な援助、そして施設の実習指導者の協力が必須である。学生の実習課題を、学生と教員と施設職員の三者が共有し、学生を指導・援助する可視的な切り口とすることができれば、学生の実習がより充実したものになるであろう。(北九州市の児童養護施設・乳児院の 2002 年 12 月の主任保育士研修会で学生の実習課題の設定について話し合いがなされ、合意が得られた。)